平成30年度
応神天皇皇后仲姫命 仲津山陵倒木復旧工事に伴う調査

はじめに

仲姫命仲津山陵は大阪府藤井寺市沢田4丁目に所在する墳長約290ｍの前方後円墳で、遺跡としての名称は仲津山古墳である。

平成30年9月に日本列島へ上陸した台風21号は近畿地方を中心に甚大な被害をもたらしたが、陵墓も例外ではなく、当陵では南側のくびれ部から後円部東側にかけて倒木が多く発生した。これらの倒木のなかには幹が折れずに木全体が倒れ、土をかかえて根ごと起きあがってしまったもの（以下、根起きとする）もあった。当庁では台風の通過後に陵墓地内の被害状況の把握につとめたが、当陵における根起き箇所のうち、1箇所で埴輪が露出していることを確認したため、倒木の伐採などの復旧工事が実施されるまえに状況の確認と精査をおこなって記録化し、埴輪を回収する調査を実施することとなった。調査は平成31年3月12～15日におこない、調査の実施にあたっては藤井寺市教育委員会の天野末喜氏、山田幸弘氏、上田睦氏、新開義夫氏、泉眞奈氏、河合咲耶氏からご指導を賜った。

なお、今回の報告で使用する座標は、境界標識28号を〔X：0、Y：0〕、27号を〔X：12.082、Y：0〕とする任意の座標系である。標高は、境界標識28号を29.5ｍとする昭和56年に修正作成された陵墓地形図のデータを使用した。図面で使用している方位記号の方角は磁北である。

また、今回の報告にあわせて、平成20年に墳頂部（位置は第75図を参照）で採集した円筒埴輪1点（第78図7）も紹介することとした。

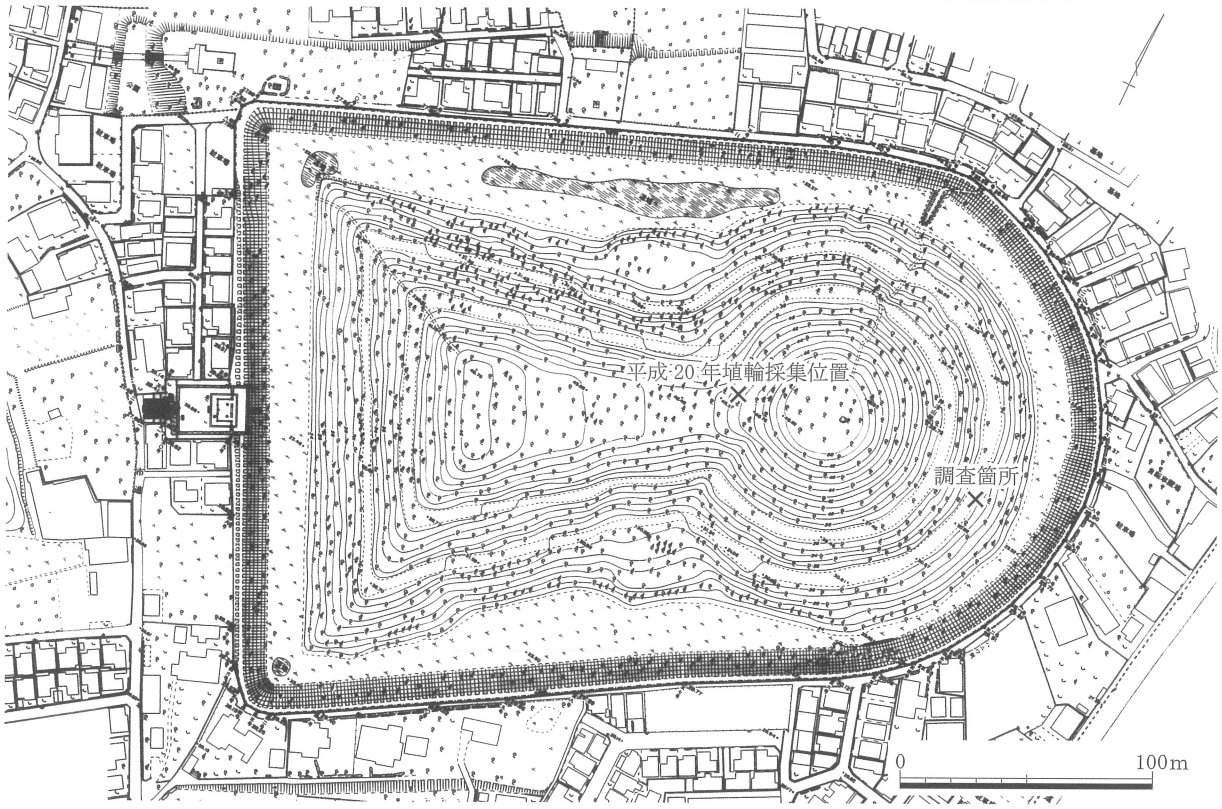
1．調査の経過と調査箇所の状況

今回調査することとなった根起き箇所は当陵の後円部東側の第1段テラス[1]上に位置する（第75図）。土をかかえて根ごと起きあがった部分の大きさは横幅が約2ｍ、高さが約1ｍであった。この根起き箇所を精査したところ、計4個体の円筒埴輪（埴輪1～4）が根起きにまきこまれてしまっていることを確認した（写真1、図版43）。これらの円筒埴輪の間隔は、中心同士で計測するとおおむね45cm前後であった。これは当陵の外堤の埴輪列と同様の数値である。

このように埴輪が確認されたため、この根起き箇所の測量をおこなったうえで、根起き部分の土を落としながら、埴輪片を回収することとした。同様の調査は、大市墓においても平成10年の台風7号による倒木被害にともなって実施されている（本誌第51号にて報告）。

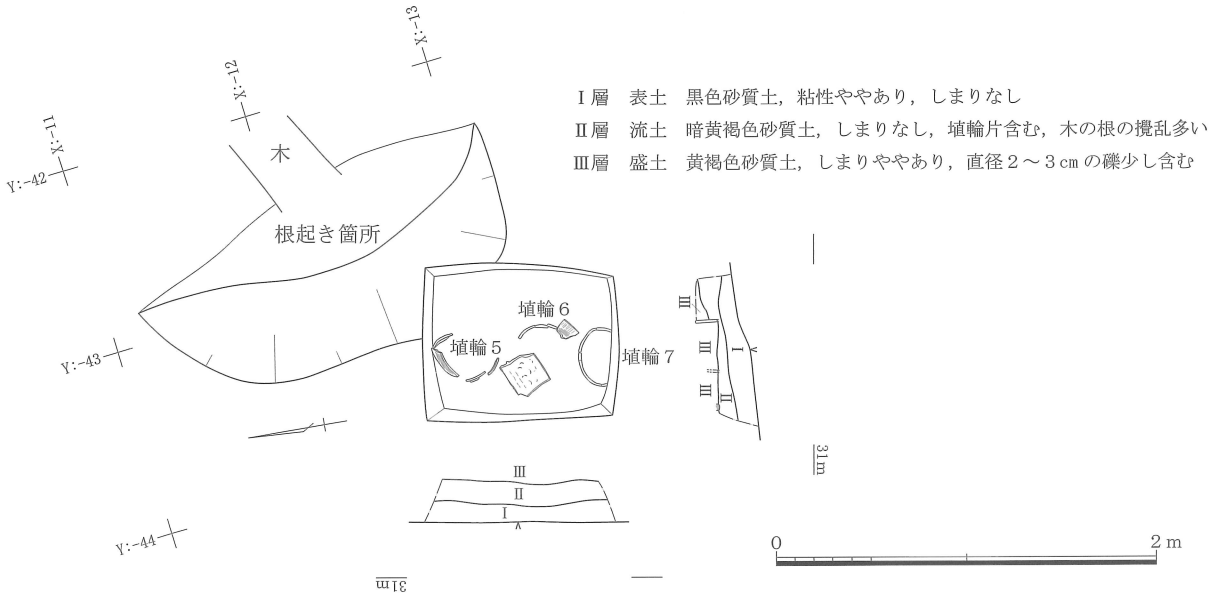
この4個体の円筒埴輪は、当陵第1段テラスの円筒埴輪列を構成するものと推測されたが、そのことをだめ押しで確認するため、根起き箇所にかかる形で約1ｍ×約0.8ｍのトレンチを設定し、円筒埴輪列の有無を確認することとした。その結果、第1段テラス上の円筒埴輪列を構成する円筒埴輪3個体（埴輪5～7）が検出されたので、根起きにまきこまれた埴輪も円筒埴輪列のものであることが確定した。なお、調査時の見込みでは、トレンチ内で検出された円筒埴輪と根起きにまきこまれた円筒埴輪が整理作業において接合することを期待していたのであるが、そうはならなかった。それぞれ別個の埴輪であり、根起き箇所とトレンチ内の円筒埴輪列は、北から埴輪4→3→2→1→5→6→7の順に配置されていたと考えられる。

トレンチ内で確認された土層は、上から表土、流土、古墳築造時の盛土の3層であった（第76図）。地表面から20～30cmで盛土面になっており、非常に浅い位置に古墳時代の面がのこっている。ただし、根起きが発生していることからもわかるように、今回の調査箇所では木の根による攪乱が著しく、円筒埴輪を設置する際の掘方があったかどうかはよくわからない。現状では、墳丘構築時の盛土であるⅢ層は面的にみて同質であり、積極的に掘方の存在を推測する状況ではない。どちらかといえば掘方をもたず、墳丘を構築するのと同時に円筒埴輪列を設置していたのではないかと推測される。現状では、円筒埴輪を設置する際、第1



第75図　仲津山陵　調査箇所位置図（1/3,000）

写真1　仲津山陵　埴輪露出状況



第76図　仲津山陵　平面図・断面図（1/40）

条突帯付近まで埋めていたと考えられる。なお、円筒埴輪列は第１段テラスが第１段斜面へと下る傾斜変換点から１ｍほど第２段斜面寄りに位置しており、第１段テラス全体でみるとだいぶ第１段斜面側に存在する。

なお、Ⅲ層の上面では直径２～３cmの石を確認できる箇所があったことから、第１段テラス上面には石が敷かれていた可能性も考えられる。しかし、上述したように木の根による攪乱が著しく、残存状況が良好ではないため、確定はできない。

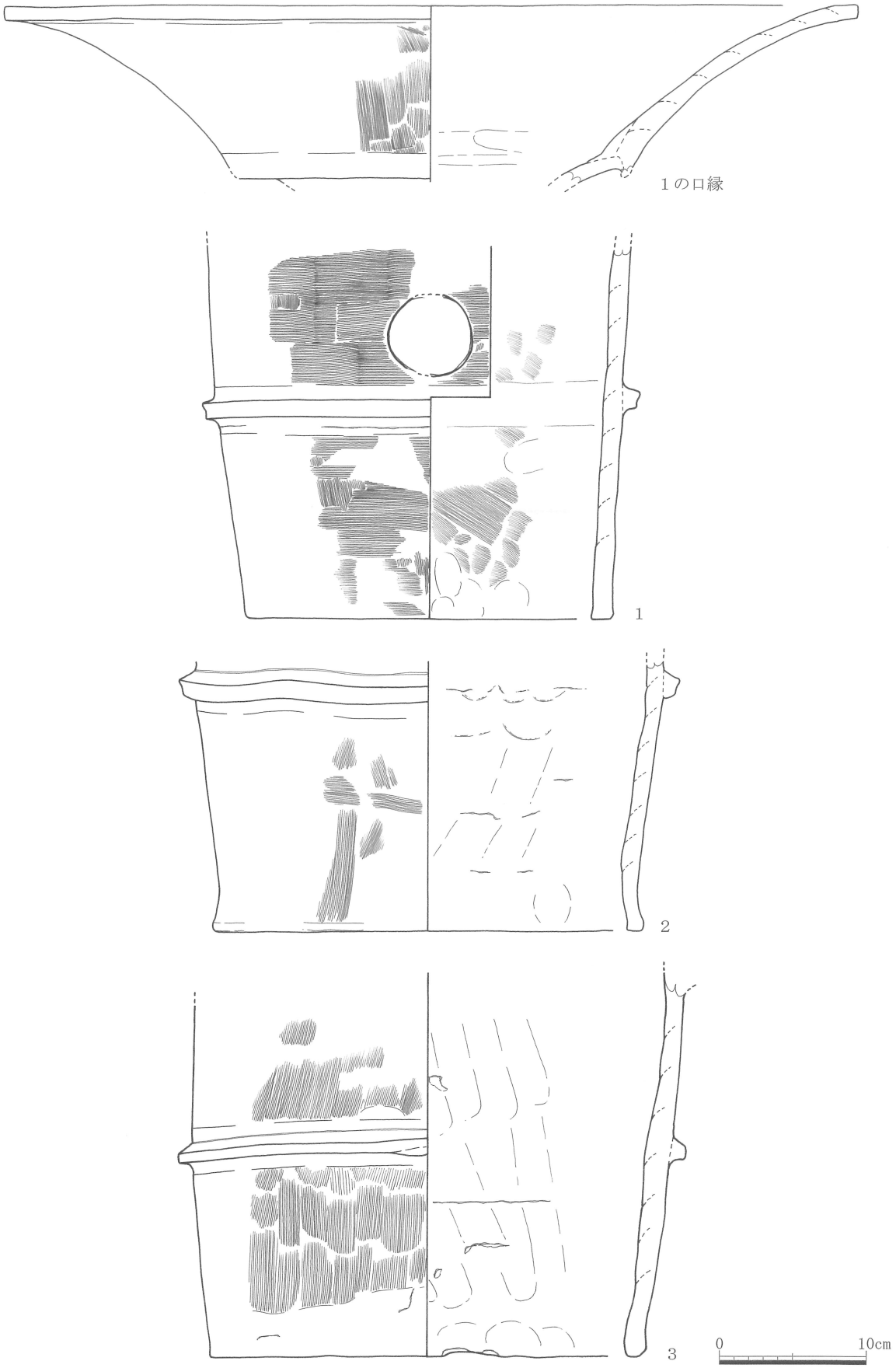
２．出土遺物

今回の調査で出土した遺物はすべて埴輪片で、その総数は567点（ビニール袋で９袋分）であった。埴輪はいずれも第１段テラス上の円筒埴輪列を構成するもので、円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪であり、形象埴輪は確認できていない。黒斑をもつ個体も多く、いずれも野焼き焼成であったと考えられる。確認できる透孔の形状は円形のみである。出土品のなかには、円筒埴輪の口縁部の破片がなく、口縁部の形状は不明である。胎土には、直径３mm前後の砂粒がやや多く含まれ、とくに花崗岩起源と思われる白色粒と金雲母がめだつ。外面の二次調整はヨコハケとなるものが比較的多いが、明瞭な静止痕がみられるものは少ない。これらの特徴から、今回の調査で出土した埴輪は、川西編年(2)のⅢ期に位置づけられるものと考える。

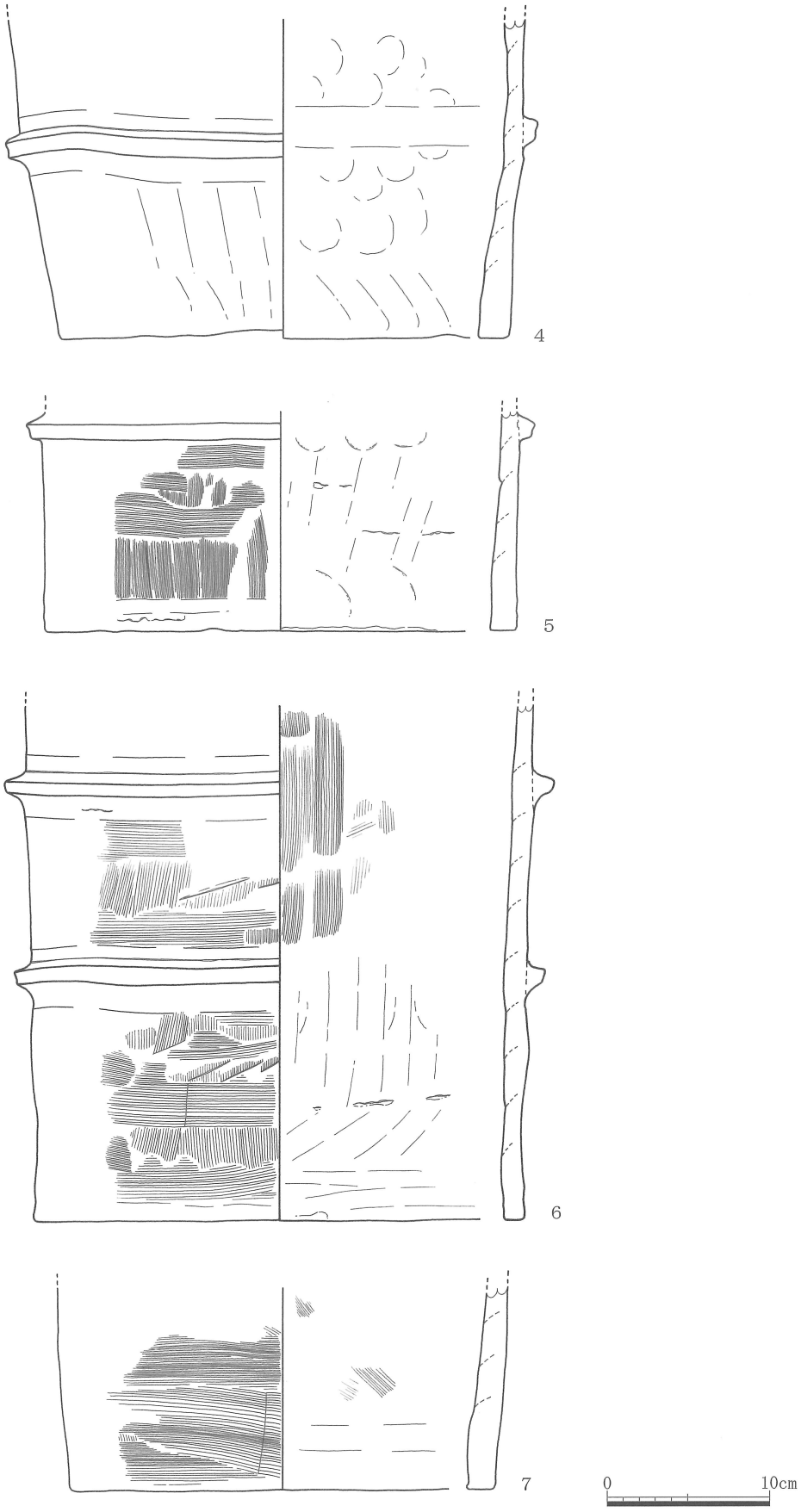
すでにふれたように、今回の調査で確認した埴輪は、埴輪１～７までの７個体である。このうち埴輪７は取りあげずに現地保存したので、埴輪１～６までの６個体を図化した（第77・78図、図版43～45）。なお、第77・78図の１～６の通し番号は、検出状況における埴輪１～６の通し番号と対応する。また、平成20年に墳頂部で表採した円筒埴輪底部についても図化して紹介する（第78図７）。

１は朝顔形埴輪である。口縁部の直径は58cmに復元できる。底部の直径は25cm、第１段高は最大で15.3cmである。第２段には円形の透孔が二つ穿たれている。外面調整はタテハケののちにヨコハケがほどこされている。ヨコハケには休止箇所がみられるものの、明瞭な静止痕となってはいない。このヨコハケは各段で２周以上はほどこされていたようである。内面にも左斜め上方向のハケがほどこされている。この個体では、口縁部の１次口縁と２次口縁の接合方法が特徴的である。通常であれば接合部分の外側に粘土紐を付加して突帯を形成するが、そうした粘土紐の付加が外面にはみられない。

２は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪である。底部の直径は29.4cm、第１段高は17cmである。他の個体に比べて底部付近の器壁が薄い。外面調整はタテハケののちにヨコハケがほどこされているが、ごくわずかにみ



第77図　仲津山陵　出土品実測図（1）(1/4)



第78図　仲津山陵　出土品実測図（2）（1/4）

られるのみである。第１条突帯の上辺には、突帯設定の工具があたった痕跡と思われるいわゆる「Ｌ字痕」がみられる。内面調整はナデのようである。

３は円筒埴輪と推測される。底部の直径は29.6cm、第１段高は最大で14.6cmである。外面調整は、第１・２段ともにタテハケのみである。第１条突帯の上辺には、突帯設定の工具があたった痕跡と思われるいわゆる「Ｌ字痕」がみられる。また、第１段の外面底部付近にも幅３cm程度の横方向の擦痕がみられることから、これも突帯設定にともなう工具の痕跡ではないかと推測される。内面調整はナデである。

４は円筒埴輪と推測される。底部の直径は27cm、第１段高は最大で13.1cmである。外面調整はていねいなナデであり、とくに第２段でナデの単位を観察することは難しい。第１段では縦方向のナデが２回の単位でほどこされているようにもみえる。この部分の状況から推測すると、板ナデのような調整方法であったのかもしれない。この個体でみられる外面調整のナデは二次調整のヨコハケが省略されたたぐいのものではなく、二次調整としてていねいにナデがほどこされた結果であると考える。なお、第１条突帯の上辺には、突帯設定の工具があたった痕跡と思われるいわゆる「Ｌ字痕」がみられる。内面調整もナデであり、指頭圧痕も残存している。

５は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪である。底部の直径は28.8cm、第１段高は12.7cmである。突帯の剥離箇所では凹線らしき痕跡がみられる。外面調整はタテハケののちにヨコハケがほどこされている。ヨコハケには休止箇所がみられるものの、明瞭な静止痕となっていない。このヨコハケは２周以上ほどこされていたようである。内面調整はナデである。

６は円筒埴輪と推測される。底部の直径は30cm、第１段高は最大で16cm、突帯間隔は11.5cmである。外面調整は第１・２段ともにタテハケののちにヨコハケがほどこされている。第１段でみられるヨコハケには、一部に静止痕もみられる。第１・２段ともに外面の中央付近で板押圧痕あるいはタテハケの始点と考えられる板状の工具痕がみられる。第１段についてはタテハケの始点と判断して図化したが、板押圧痕も混在するのかもしれない。そうであるとすれば、突帯貼付時の板押圧技法がその後の調整で消されずに残存する古い事例となろう。第３段の外面調整については、磨滅しており不明である。第１・２条突帯の上辺には、突帯設定の工具があたった痕跡と思われるいわゆる「Ｌ字痕」がみられる。内面調整は第１段付近がナデであり、それよりも上では縦方向を基調とするハケになる。

７は平成20年に墳頂部で採集した円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪の底部片である。底部の直径は26cmである。外面調整にはヨコハケが２周以上ほどこされており、一部には静止痕もみられる。内面調整は一部に左斜め上方向のハケがほどこされている。

今回報告した円筒埴輪類の傾向をまとめておくと、底部の直径は30cmに達しない程度のもので統一されており、第１段高は16cm前後のものと13cm前後のものの二者がみられる。突帯間隔が判明するのは６の11.5cmのみである。第１段高については17cmとなるものもあり、川西編年Ⅲ期の古市古墳群においても、第１段高の高い個体が存在することが確実である。似たような様相は佐紀古墳群に属する小奈辺陵墓参考地においても確認されており、関係性が注意される。この時期に各地でみられる第１段高の高い円筒埴輪をすべて大和からの影響とする理解には修正が必要であろう。

さいごに、当陵第１段平坦面上の円筒埴輪列でもちいられた円筒埴輪の段構成を推測しておきたい。底部から口縁部まで接合する個体がないので確実ではないが、朝顔形埴輪となる１で第２段に透孔があり、それ以外の個体（おそらく円筒埴輪）で第２段に透孔がみられないことが手がかりになると考える。すなわち、朝顔形埴輪では円筒部の第２、４、６段、円筒埴輪では第３、５段に透孔があったと考え、直径もそれほど大きくないことを勘案すると、当陵第１段平坦面上の円筒埴輪列でもちいられた円筒埴輪は５条６段構成（もしくは６条７段構成）だったのではないだろうか。そうだとすれば、川西編年Ⅳ期でみられる７条８段構成は、Ⅲ期ではまだみられない可能性を示唆するのかもしれない。

まとめ

当陵ではこれまで拝所周辺で調査がおこなわれたことはあったが、墳丘内で調査がおこなわれたことはなく、その様相は不明であった。したがって、今回の調査によって築造当時の面が地表下20～30cmほどの浅いところに残存しており、非常に良好な状態で築造時の状況を保持していることがわかったことは大きな収穫といえる。

また、今回の調査では、当陵の第1段テラス上の埴輪列を構成する円筒埴輪7個体（朝顔形埴輪1個体を含む）を確認した。そのうち埴輪1～4は根起き箇所、埴輪5～7はトレンチから出土しており、埴輪7をのぞく計6個体について、調査・記録化をおこなったうえで取りあげた。

当陵の埴輪は、これまで大阪府教育委員会や藤井寺市教育委員会が外堤でおこなった調査などでしられているが、墳丘本体の様相は不明であった。今回の調査の出土品が、今後の研究で活用されていくことを期待したい。

なお、今回の調査は台風による倒木被害の復旧にともなうものであり、調査後に当陵では調査箇所も含めた倒木の伐採を実施し、陵域内で処理をおこなった。　（加藤一郎）

註

（1）　陵墓地形図（第75図）では表現されていないが、現地での観察や航空レーザーによる測量図をみると、今回の報告で第1段テラスとする平坦面と墳裾とのあいだに、もう一つ幅の狭い平坦面が存在することはあきらかである。ただし、この平坦面が古墳築造時から存在したものであるのかどうかは不明であり、今後の検討を要する。

（2）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号、日本考古学会、1978・79年。

1　根起き状況

2　埴輪列確認状況

3　埴輪 2

4　埴輪 5

1　埴輪 1

2　埴輪 3

1　埴輪 4

2　埴輪 6